

# はぐくみ会だより

第 36 号

平成25年11月 1 日

所蔵作品紹介

(35)

「斜度の光年Ⅲ」(金工・鍍金)

大角 勲作



(高さ70×幅60×奥行15)

大角先生は昭和15年、高岡市生まれ。本校の金属工芸科を昭和34年に卒業、同年に高岡市金属指導所の技師に就いた。「用の美」から脱却した工芸美術運動を展開した金工家、故蓮田修吾郎(神奈川)との出会いを機に金属による造形美を追求、宇宙や自然の摂理といった壮大なテーマを掲げ、用の美にとらわれない工芸美術を創造。24歳で日展に初出品した抽象的なオブジェ「蒼風」が入選。日本現代工芸美術展では平成7年に内閣総理大臣賞、13年に文部科学大臣賞を受賞した。

独自の宇宙観を表した作品は、哲学的な意味を深め、平成12年に「天地守道」シリーズへと深化。15年、自然が放つ「気」を表現した「天地守道(生)」が日本芸術院賞を受賞した。

表紙の作品は、平成4年、日本現代工芸美術展出品作の寄贈。初期の抽象作品から「天地守道」シリーズ途上の作品で、同心円の造型に、鋭い稲妻を連想させる幾何学的なオブジェを追求、真鍮の色合いに同化させた斬新な作である。作家として、これからの活躍が望まれたが、平成20年、69歳で逝去。富山県美術界を牽引され、県在住者として初めて日本芸術院賞に輝かれたこと、本校の誇りです。

## 同窓生ギャラリー

平成25年 4月13日(土)ー5月6日(月)

第80回

2013

## 工芸建築科同窓会・作品展

工芸建築科は今年(平成25年)で60年の歴史を刻み、卒業生も23000名を越え、様々な分野で目覚ましい活躍をしている。

今回の展示は、元教員の藤田順吉朗氏(創建築事務所)をはじめ、昭和30年卒から平成19年卒まで、34名の建築作品が展示された。藤田氏は本校の本部棟設計・建築に関わり、建築外観に高岡の景観づくりと水切り機能を併せもつ鋳物の庇を考案、また、季節や時間、見る角度により建物の表情を変えるアルミ鋳物ルーバーをデザイン・建築外観に組み入れ、その実物を展示した。会員が近年設計、建築した行政の恒久的なビルディング(病院・センター・植物園・消防署)や民間の住宅に暮らしやすさと自然を深く取り入れた邸宅の完成模型・写真パネルでアピール。他に全国建築板金競技大会・技能競技の部で優勝した唐島盛一氏の作品「花器」が展示された。建築に関わる多くの作品、建築界の現在、未来が見られた。



平成25年 6月16日(日)ー7月7日(日)

第81回

## 長谷川和衛ペン画展

本校建築科を1963年卒業、50年間建築と関わりながら、独自のペン画を創作、建築家の発想力もあり、三点透視図法による表現は、現場主義に深く根ざし、糸と針で位置決め交点を捜し、ロットリングで点描画を描く。茅葺き屋根の民家や、棚田の風景、古い町並み街道など20点余りのパネル張り作品を展示。

モノクロ作品の表現に徹し、モノトーンが郷愁に趣きを加え、古民家と森・山間の遠望とのせめぎ合いに、日本の原風景を視る。鳥瞰図絵師として、立体表現の世界を現す。村落の静寂が画面を通してリアルに視覚に飛び込んでくる。

氏は、地域環境文化に深く傾注、福光町生まれでもあり、雪の民俗学でも、多くの著書・評論があり、他に「茶室の起こし絵」の制作にも関わり、指導に当たっている。

長谷川氏は、自分を見つめるなかで、「絵なのか、図面なのか、絵図面なのか、図面を描く仕事でなく、絵を描きたかった」と記している。



## 第42回伝統工芸 日本金工展

平成25年 5月12日(日)ー6月14日(金)

標記展は、高岡で22年ぶり、本校美術館では初めての展覧会となる。会場は金工作品の展示スペースに合った、ケース配置など、作品展示にあつた空間が創り出された。同時期に高岡市美術館で開催された、「日本伝統工芸展」の開催と相乗し、2500余名の高い入館者があった。

日本における金属工芸の伝統は古く、弥生時代には朝鮮半島から青銅器および鉄器とその製作技術が伝わり、早くも銅鐸など日本独自の金属器を製作しています。本展は、このように我が国に古くから伝えられている鋳金、鍛金、彫金等の金属工芸の保存と発展を願って、現代の生活に即した作品を創り、広く一般の鑑賞に供している。入選作109点の中で、文化庁長官賞は、高岡の中村孝富氏が「黄銅花器(雅)」で受賞、本校卒業の般若保氏の「吹分大花入」や高岡の重要無形文化財保持者、大沢光民氏の「鋳ぐるみ線文花筒」など、全国の中でも、高岡のレベルの高さを実感する内容であった。

また、本校美術館の所蔵作品から、資料展示として明治期の金工品を同時に展示し、名工の作に接する機会を提供した。



第82回

第6回 青湧会展

平成25年 8月3日(土)ー8月25日(日)

昭和33年に本校窯業科を卒業した、太田紀久雄(蒼久)氏が代表を務める、青湧会員18名によるグループ展。平成2年に発足し今年で第6回展を迎えました。ジャンルは絵画(油絵・日本画・水彩画・ちぎり絵)、工芸(乾漆・陶芸)、写真、ステンドグラスなど平面作品・立体作品のバランスも良く、展示点数は57点。今回特別展示として、二上山に生息する昆虫類(チョウ類・トンボ類・せみ類など)の標本が多数展示され、夏休みの子供たちが興味をそめた。

本格的に絵画や写真に取り組みれている作品郡の中に、瑞瑞しさ溢れる「ぶどうの房」を描いた作品が印象的である。

それぞれの個性溢れる作品に、来館者も興味深く見入っておられました。



第83回

第6回 夢散歩展

平成25年 8月31日(日)ー9月23日(月)

新湊在住の豊本外良氏(電気科卒)を中心に、洋画・フレスコ画・陶芸・写真のジャンルに7名が出品。

豊本氏はバルブ・パイプ等をモノクロで表現、構成の妙が出ている大作。岡山氏は地域の獅子舞の賑やかさと、町の風情を7点の連作で表現。磯部正子氏は人物画の群像などフレスコ画独特の、やわらかな色彩で描く。草島氏は陶芸に挑んで20年余り、皮工芸を連想させるオブジェ・花器など。田村氏は自然をモチーフに色調が印象。本郷氏は題名「回想電車」の作品は、人間社会の日常を比喻も交え、独自の構成で訴える。磯部敏彦氏は日本各地のひとコマを写真に収めた。

各自、作品から受けるインパクトを保ちながら、各々の挑戦に「夢」を託すのでしよう。



藤子・F・不二雄展

平成25年 7月27日(土)ー8月25日(日)

本名、藤本 弘氏は富山県立高岡工芸高等学校在学中から4こま漫画を新聞社に投稿、その作品群は、後のすばらしい創作を予感した。

本年は生誕80年になる。昭和27年本校の電気科を卒業、本校を出発点として漫画家(藤子・F・不二雄)の道を歩まれました。今回の展示では、各時代にコーナーを設け、「少年時代」は幼少の写真から始まり、幼稚園時代の全体写真、小学校時代の校舎や生徒の全体写真、藤本家の鳥瞰図、少年時代の愛読書



「アンクルトムス・ケビン」などの実物を展示。「高校時代」は、工芸高校在学中に投稿した、4コマ漫画や、藤本 弘氏の記念アルバムなど本校の貴重な資料を展示。「藤子・F・不二雄時代」では、色紙に描かれたドラえもんやオバQなどと、初期の漫画本を展示し、漫画家・Fを紹介。

壁面では、複製原画30点で、東京・両国で書かれた漫画から絶筆となった漫画まで有り、漫画家・藤本 弘の軌跡が伺える資料を展示、今回のために制作した『藤子・F・不二雄ふるさと高岡年表』は、藤本 弘の全貌を知る、充実した内容となった。

常設展 Ⅰ期

6月18日(火)ー8月25日(日)

大塚秀之丞と門下生作品展

この度の常設展では、大塚秀之丞(号・棠堂)と教え子の作品を通して、本校の収蔵品を再発見する。大塚秀之丞は、明治3年、山口県(長州)の藩士の家に生まれ、幼少の頃より粘土細工を好み、明治25年に、九谷焼製陶業者に招かれ、小松で技術指導をする。明治27年の本校創設に際し、24歳の若さで鑄金科教師として赴任。本校には大正6年までの24年間に在職し、将来の作家や教諭を初め、多くの逸材を教えた。大塚の人物作品は、顔の表情や指先の動きなど、身体各部位の微妙な動きを確かなデッサン力で制作されている。大塚の門下生は、師の教えの中で、彫塑家として大成していった。

今回展示の畑 正吉・長谷川勝之・秦 紹世は帝展・文展に作品を発表、彫刻家として活躍。国方林三、松村秀太郎、山本与三次郎、寺畑助之丞、竹田与作は教諭として、学校教育と郷土の彫刻界に多くの足跡を残し、恩師、大塚秀之丞の教えの中から、多くは、芸術家としての生きざまを貫いた。



常設展 Ⅱ期

8月31日(出)ー11月4日(日)

高岡漆器名品展

(併設・本校同窓生漆器作品展)

高岡の漆芸は、1609年の開町間もなくより始まったと伝えられています。本校の創立時に「髹漆科」が置かれ、高岡漆器の開発と研究に本校の教育が重要視されました。今回の展示

には、高岡漆器の双璧、勇助塗創始者、石井勇助(初代)の「山水草花模様茶棚」・独特な錆絵表現を開発した、三村卯右衛門の「円形額鷹」また、立野太平治を祖とする「青貝塗」の武蔵川健三「青貝唐山水飾鉢」・村上九郎作の「高岡彫手炬」など、高岡の漆器を代表する名品を展示。

「勇助塗」は江戸時代の末期、初代石井勇助が開発した技で、様々な技が総合的に用いられる「ブランド」ともいえます。初代石井(米屋)勇助は当時、「唐物」として珍しかった中国・明時代の漆器の研究を重ね、この技を生み出した。

「錆絵」も高岡を代表する漆芸の技、漆に「砥の粉」を混ぜた「錆漆」は粘りがあって厚く塗ることができ、立体的でリアルな表現が可能です。さらに、錆絵の上に「時絵」や「彩漆」で描くことにより、カラフルで絵画的な表現もできます。

青貝塗は、きらびやかなアワビなどの貝を薄く切った漆器にはり付ける「螺鈿」の技の一種です。アワビ貝のほかに、夜光貝・蝶貝などが用いられ、いずれも貝特有の真珠色が漆の色艶とよく調和し、独特な味わいがあります。

高岡彫の技法は、木地を彫刻して錆漆を塗り、漆を何度も塗っては磨き、彩漆で模様を描き、古味(灰墨)を溝に付けて、最後は手のひらで磨いて仕上げます。

右記の漆技法の秀作を中心に、本校初代校長・納富介次郎デザインの「双鯉大盆」は、本校が高岡の漆(うるし)業界発展に深く関わった作品で、今日の漆芸デザインに刺激を与えた代表作、漆工教育に尽力された教授・作家の作品を加え、26点を展示。明治初期の作品から一覽できる漆芸展となりました。



尚美展関連「同窓生作品展」

106回を数える尚美展が本校で開催(10月19日(出)・20日(回)され、多くの来場がありました。美術館に於、関連の「同窓生作品展」を開催。卒業生・同窓生で現在、公展・個展など積極的に発表されている、現役の作家作品を展示、20歳代から80歳代までの、幅広い層に出展いただきました。日本画・洋画・工芸・彫刻のジャンルに秀作がそろいました。日本画は道吉勝重・石崎外志雄ら5名、洋画は太田紀久雄・頭川 徹ら9名、工芸は般若 保麻生三郎ら7名、彫刻は竹田貞郎・米納宗宏ら3名の32作品を展覧。今日、制作された、現代芸術の粋を表現する空間を持つこと、継続する意義を進めてまいります。

編集後記

本校・デザイン科を昭和39年に卒業、50年の年月が流れました。富山県の文化・美術館行政の現場に40年余り、美術館の仕事とおして、母校の青井記念館美術館との接点は、昭和の時代からでした。貴重な資料や美術品をお借りして、美術展を開催しました。今年度から美術館の管理運営を託され、今までの経験を生かして、館の発展に尽くしてまいりたいと考えています。

今年度は、「特別展」として、高岡での開催が22年ぶりの「第42回伝統工芸・日本金工展」と、昭和27年に本校電気科を卒業、漫画家「藤子・F・不二雄展」が生誕80年として開催しました。

上半期に二つの特別展、所蔵品を主体とした「彫塑家の常設展」・漆芸作品の常設展」など、多くの芸術作品に出会えました。

編集発行

富山県立高岡工芸高等学校  
青井記念館美術館はぐくみ会  
住所 933-8518 高岡市中山一-1-20  
TEL (0766) 21-1630 (内線 611)  
FAX (0766) 21-1631